特別支援学校における地域資源活用に関する検討

～授業で地域資源を活用する利点と課題について～

○本多由香　　武田　篤
（秋田大学大学院教育学研究科）　（秋田大学教育文化学部）

KEY WORDS：特別支援学校　地域資源活用　地域との関わり

Ⅰ　目的

平成24年7月に文部科学省初等中等教育分科会に設置された特別支援教育の在り方に関する特別委員会は,「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」を発表した。この中で特別支援教育の推進のための重要な柱の一つとして,「地域社会の中で積極的に活動し，その一員として豊かに生きることができるよう，地域の同世代の子どもや人々の交流等を通して，地域での生活基盤を形成する」ために，可能な限り共に学ぶことができるよう配慮することが挙げられている。このような中で,全国の多くの特別支援学校において，地域の小・中学校との交流及び共同学習が行われ，その取組や成果について検討されてきている。一方，地域資源を活用した取組については徐々に検討されてきているものの,その内容は単発的なものから継続的なものまで様々で，試行錯誤しながら実践を行っているのが現状である。そこで本研究では，特別支援学校において地域資源を有効に活用するための方向性について検討することとした。

Ⅱ　対象と方法

平成29年4月に,A特別支援学校の地域資源を活用した授業を担当している高等部の教師24名を対象に,授業に活用する利点や課題について自由記述によるアンケート調査を実施した。内容はKJ法に準じてカテゴリーし,分析した。

Ⅲ　結果

アンケートは19名から回収できた。ラベルカードは全部で51枚となり，表1に示したように大きく「メリット」と「課題」に分類された。メリットについては,自己有用感,本物の体験，地域住民への理解啓発の３つに分かれた。課題については，授業への活用の難しさと地域との連携・調整の２つに分かれた。

1-1)自己有用感:地域資源を活用するメリットとして最も多かったのが「自己有用感」の高まりであった。「学校関係以外の方に認められ，褒められる」ことで「自信や意欲が向上」することが多く挙げられた。また,「感謝される体験」が生徒の「自己有用感」に結び付くと実感する教師が多かった。この他，授業を通して「応用したり，他の場面で般化したりする力がつく」ことなどが挙げられた。

1-2)本物の体験：次に多かったのが「本物の体験」ができることであった。A特別支援学校高等部では，地域のボランティアに太鼓指導をお願いしていることもあり「専門家からの的確な助言」「その道のプロの指導」が得られることが挙げられた。また，生徒が「本物の迫力を体験」できるだけでなく，教師自身も指導力を向上させることができ,「学習の広がり」が図られることが挙げられた。

1-3)地域住民への理解啓発：地域資源の活用が「地域住民への理解啓発」になることが挙げられた。中でも，地域に出向き住民と交流することで「地域住民の障害理解になる」と感じている教師が多かった。また，学校の理解啓発として「学校やそこに通う児童生徒を知ってもらうよい機会となっている」ことが挙げられた。

表１　地域資源活用のメリットと課題　対象者19名　n=51

１ メリット	
１）自己有用感(17枚)	・意欲，自信の向上(11枚) ・感謝される体験(4) ・応用・般化力(2)
２）本物の体験(13)	・専門家からの学び(6) ・本物との触れ合い(4) ・学習の広がり(3)
３）地域住民への理解啓発(9)	・地域住民の障害理解促進(6) ・学校の理解啓発(3)
２ 課題	
１）授業への活用の難しさ(7)	・教師の資源開拓力(4) ・学習計画の調整，変更(3)
２）地域との連携・調整(5)	・打ち合わせ時間の確保(3) ・継続した関わり(2)

2-1)授業への活用の難しさ:課題として最も多かったのが,「授業への活用の難しさ」であった。メリットは感じているが,「資源開拓の仕方が分からない」ことや「資源の吟味が難しい」ことが挙げられた。また，授業計画の調整や変更が難しいとの意見が挙げられた。他に「学校周辺の地域に関する教師の知識」や「資源発掘に関する教師のアプローチ力」が求められるとの意見も挙げられた。

2-2)地域との連携・調整:地域資源の活用にあたっては,相手方との連携が重要だが,「十分な打ち合わせの時間の確保」や「スケジュール調整」が難しいといった課題が挙げられた。また，卒業後を含めた，生徒と地域との「継続したつながりに発展しにくい」ことなども挙げられた。

Ⅳ　考察

今回の調査から，多くの教師が授業に地域資源を活用することにメリットを感じていることが明らかとなった。中でも，地域に出かけて行くことは，校内の学習だけでは得ることのできない効果があると実感している教師が多いことが分かった。特に,「これまで自信が持てず，引っ込み思案だった生徒が，地域住民との触れ合いや活動を通して，自分に自信を持ち,自分から関わろうとする意欲が高まる」など，生徒の「自己有用感」が向上することを評価していた。また，教育効果を上げるために，地域にいる「専門家からの学び」の機会を設けたり,「本物の体験」を授業に取り入れたりと授業づくりを工夫していることが分かった。以上のことから，地域資源の活用について，教師は生徒の技術向上に加え，意欲や自信の高まりを積極的に評価していることが明らかとなった。さらに，地域住民との関わりは学校や生徒を理解してもらう取組の一つとなっており，障害理解の推進にもつながると実感している教師も多くいた。これらのことから地域資源の活用は，地域を巻き込んだインクルーシブ教育システムの構築につながる，有力な取り組みであると考えられた。今後は，地域との関わりが児童生徒，地域双方にとってメリットがあることを地域住民への意識調査等を通して明らかにしていきたい。

(HONDA Yuka, TAKEDA Atsushi)